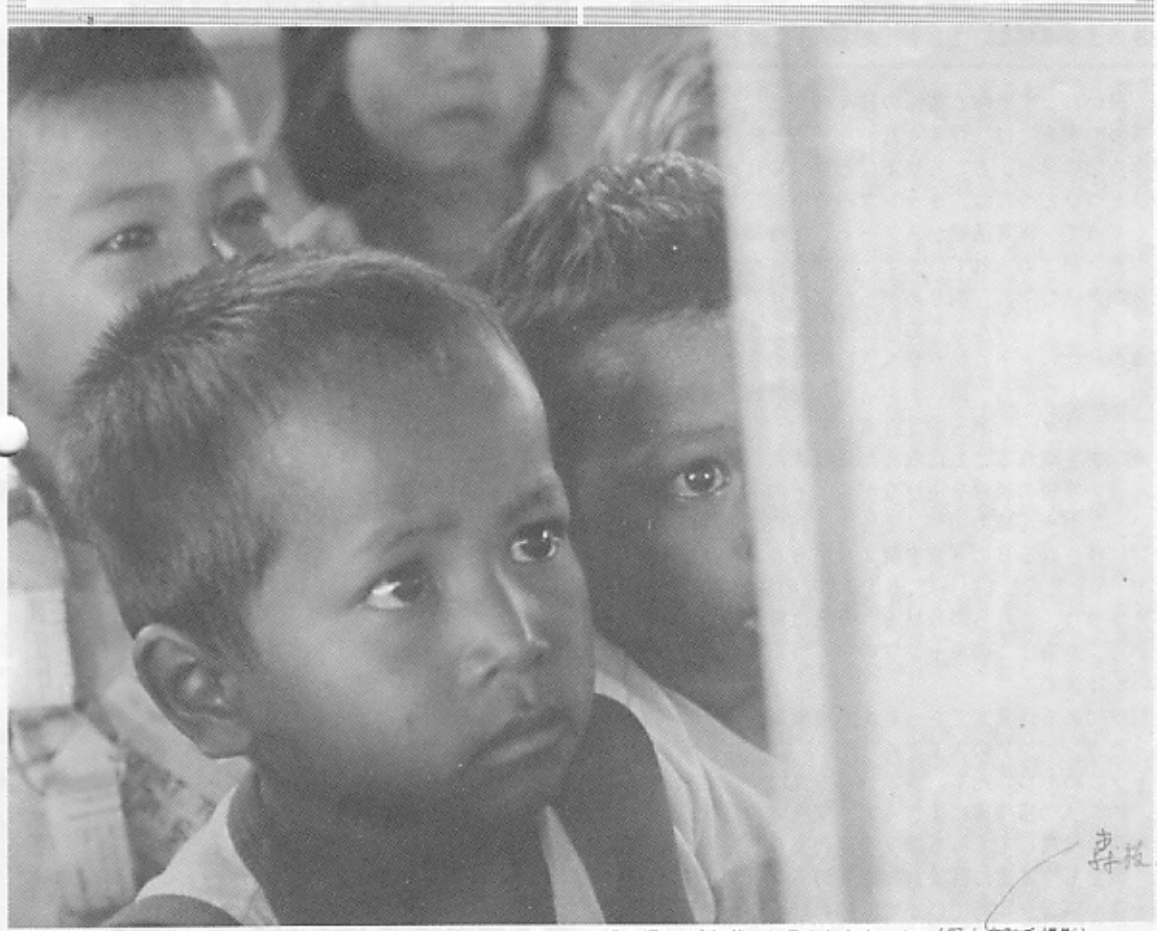
1981年4月10日発行

幼い難民に未来を……CYRニュース

第3号

事務所：〒150東京都渋谷区広尾4-3-1 ☎03-499-1226　普通預金口座：第一勧銀広尾057-1280817　郵便振替口座：東京1－36227



保母さんの手許を食いいるように眺めるカンボジアの幼い難民。この眼の輝きは1年前には見られなかった。（~~野中堂弘氏撮影~~）

難民の行く手、照らす灯――「希望の家」に注ぐ熱っぽい視線

私達が長い間、待望していた「希望の家」（幼い難民保育活動の中心基地となる研修センター）が、とうとう、昨年12月16日、カオイダン・キャンプ内のセクション21内に完成しました。現地のいいぎり・ゆき代表、今年1月に現地を訪ねた川村事務局担当理事、そして会連絡係バンコク在住の横堀雅子さんの3人の方々から寄せられた開所式の風景、カンボジア難民が「希望の家」にかける強い期待などのリポートを、まとめてみました。

"小さい芸術家"達の作品も展示

その朝、竹とニッパヤシでできた「希望の家」の庭には、早くから近所の子ども達が集まり、急ごしらえのテントの下で、なにかが始まるのを待っていました。台所では、ゆうべから泊り込みのカンボジアの保母さん達が、煮えたぎる大鍋の中身を、4人がかりで裏ごしにかけています。特別許可をとって持ち込んだトリ肉も、つぎつぎとナタのような包丁で刻まれていきます。

展示室になった隣りの部屋には、織機からはずされたばかりの藍（あい）染めの手織り布をめぐらし、子ども達の絵、貼り絵、ぬいさし、それに昨年9月から12月までの保育生活を伝えるスナップ写真を貼り出しました。足もとのゴザの上には、父兄達が作った木製トラックのおもちゃ、人形、竹やあり合わせの空きビンを工夫した教材、遊具類が並びます。

子ども達の小さな指がひねりだした「ナベ」「スプーン」「コンロ」など、食生活が子ども達の大きな関心の的であることを示す作品の数々。「水牛」や「赤ちゃん」といった対象も、小さな芸術家たちのお気にいりのモデルです。しかし、目に見えて表情が明るくなごんできている子ども達ですが、やはり、ここに展示された

「戦車」「銃をかまえるベトナム兵」などと名づけられた土の塊は、これを作った子ども達がその澄んだ大きな眼で見つめてきた破壊と恐怖の数々が、けっして遠い日の出来事でないことを、見る人々に訴えています。

思いおこす恐怖と苦悩の日々のこと

部屋の中央には、昨年4月からずっと続けてきた教材作りの成果が、ところせましと並べられました。そのひとつひとつには、キャンプ内の不安定な状況をかいくぐって、保育活動がスタートした時期の、さまざまの思いがこめられています。雨期のさなか、竹の窓から吹き込む雨に、刷りあがったばかりの童謡の本を濡らすまいと、みんなで右往左往したときのこと……国境の村にベトナム兵が撃ち込む砲弾の音に、くびを縮め、怯えながら、縫いあがった人形の顔に目鼻を入れていた日々……第三国定住者リストが発表された日、キャンプを離れることになった保母さんが、他の保母さん達の羨望の視線を浴びながら、その手で切り抜いていったボール紙の図形。そして、別のタイ国内キャンプに移される日の不安を訴えながらも、毛糸で編んだボールを完成していった、もうひとりの保母さん……。

見学者は、これらの教材を、丹念に驚きの目で眺めながら、本当にこのキャンプの中でつくられたのかと、問いかけます。

別棟にある作業室でさっきまで織機製作に大わらわだったカンボジアの大工さん（父兄）も、よそゆきのシャツにめかしこんで、展示作品を見にやって来ました。約80人の招待客にまじって、開所式のお祝いに古典舞踊を披露してくれる踊り手達の姿も見え始めました。教室と作業室に囲まれた中庭のテントの下では、楽士達が調音を始めています。船の形をした木琴、胡弓に似た二絃琴の音色、ヘビの皮を張った鼓(つづみ)の快いリズム。いつの間にか、センターの柵の外には西日を浴びて黒山のように人が集まっていました。

祝いの楽の調べに民族の踊り披露

招待客が顔を揃えた頃合いを見て、もと中学校の校長先生だったチュムさんが、クメール語で開会のあいさつを述べました。さあ、「希望の家」の開所を祝う古典舞踊が始まります。淡いブルーのテントの下、ゆるやかに、そして優美に舞う少女達の姿に、観客は、ここが難民キャンプの中であること、そして苦難の続く日々のことも、しばらく忘れ去ったほどです。

"希望の家"の開所式に集まった子ども達。（野中章弘氏撮影）

上品な祝賀の舞に続いて、次はコミカルな農民の男女の踊りが、場内を湧かせます。ラマヤナ伝説の一場面のサルの踊り。3歳の幼女の愛らしく、しかもしっかりとしたしぐさの舞。あるときは哀調をおび、あるときはにぎやかに、楽の音は、夕暮れまで「希望の家」を包み、そこに集まった人々の心をゆさぶり続けました。

失われた平和な日々に思いをはせ、つぎの瞬間には先の見えない将来にいらだつ人々。複雑な葛藤につき上げられ、あきらめと望みをもてあそびながらも、ようやく自分達の手で生活を立て直そうと、一歩を踏みだした人々。それらの人々を、美しい音楽が包み、そして戦争のない世界を願い、他人の痛みを自分の痛みとして感じた日本の子ども達や、大勢のおとな達の良心に支えられて、「希望の家」は、カンボジア難民の行く手を照らす燈台のように、キャンプの中にしっかりと根を下ろしたのです。

クメール伝統の民族舞踊で、開所式をお祝い。（野中章弘氏撮影）

自力で築きあげた竹製の〝家〟

保母さんや用務員に志願者が殺到

さて、「希望の家」は、およそ4900平方メートルの敷地の中に建てられた、竹でつくられた六角屋根の建物が2棟と、その両側のやはり竹製の建物2棟から成り立っています。背後には、ここのキャンプ名の起源となったカオイダン山（イヌの山の意味）がそびえ、現在、約6万人を収容しているカオイダン・キャンプの中でもひときわ新鮮な印象を与えています。

もともと、「希望の家」は、この「会」の仕事のスポンサーであるUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の支出する資金で建てられるはずでした。ところが、予想外に多い難民の流入、キャンプ内の難民の移動、ベトナム軍の侵入などが重なって、UNHCRの財政状態は極度に悪化し、「希望の家」の建設は、つぎつぎと日延べになりました。

このため「幼い難民を考える会」では、UNHCRの資金をあてにせず、独力で「希望の家」の建設に踏みきりました。さいわい、「会」に全国から集まる、浄財、

寄付金（とくに大学、高校、各地の教職員組合などが"教育の原点"として「会」の活動を評価、拠金を寄せてくれました）"によって、「希望の家」はとうとう実現したのです。UNHCRも、建設部門の大工さんを派遣して、「会」の自力建設をバックアップしてくれました。建設の費用は、約200万円です。

"間借り"で出発した保育センターも3ヵ所に

この「希望の家」ができあがるまで、現地派遣の「会」のボランティア達は、学校とか他の欧米諸国ボランテア団体(IRC、CONCERN、REDO BARNA、CRSなど)の手で作られた給食施設の一角に"間借り"して、昨年6月から、カンボジア人の保母さん達を養成し、教材や遊具を作り、子ども達の保育をともかくスタートさせてきました。

6月から今度の「希望の家」完成までの間に、すでにこのような「保育施設」が3ヵ所開設され、養成コースを終えた保母さんの数は30人に、保育の対象になった就学前の子ども達の数は700人にも達するまでになっていたのです。

「希望の家」開所に先立って、あらためて保母さん志願者と入園希望の子ども達を募集したところ、わずか2日間に、保母さん志願は30人名乗りをあげ、こども達の定員200人はたちまちオーバーするありさまでした。母親や父親達の中からは、その後も、「なんでもいいから、希望の家で働きたい」と申し出る人が、毎朝、門前にあとをたたず、現在、保母さん志願以外に、20人くらいのおとなが、ここで動くようになりました。

この他にも上記の国際団体から、ぜひカオイダンばかりでなく、カンプット、マイルート、カプチューンなどのキャンプでも「保育施設」の開設を援助して欲しいと、要請が寄せられています。

「希望の家」は、このように次々と（カオイダンばかりでなく、他のキャンプ内にも）開設される「保育施設」の保母さん達を養成していくかたわら、200人の子ども達を相手に、保育の実習を行なう教室でもあります。

しかし、「希望の家」がいわゆる保育施設ではなく地域ぐるみの保育活動であることに、関係者は注目しています。これは父親達が、教具、生活用品（木、竹、プリキ製品）の製作とか補修を、母親達が、洋裁、手芸、織物などの幅広いユニークな活動を通して、子ども達に、働く親の姿を知らせる場でもあるのです。

運営はすべて難民"自身"の手で

その運営は、すでに、なにからなにまで、カンボジア難民自身の手で進められています。「希望の家」をとりしきる責任者も、保母さん達の卵を教える指導員も、いまではすべてカンボジア人スタッフの役目になっています。日本から行ったボランティア達は、あくまでも、その人達のコンサルタント、アドバイザー、そしてヘルパーの役割に徹しています。

全国に広がる支援の波

第1回総会で活動成果まとめる

昨年11月23日午後、「幼い難民を考える会」第1回定期総会が、東京・広尾の宮代会館で開かれ、今後の「会」の活動方針をきめ、また、この総会で改定された新しい規約によって、新しい「理事会」を構成しました。

総会には、全国から出席者35名、委任状による参加者85名、合計120名の会員が参加しました。議長に選ばれた独協大学の金田行孝さんの司会で、まず、昨年2月17日の発足総会以後の活動報告が、現地タイ・カオイダン難民キャンプ内の幼児保育活動についてはいいぎり・ゆき代表から、国内での各種の支援活動については佐藤恒夫さんから、それぞれなされました。

数えきれぬほど多くの団体や個人の力を集め

4月以来ずっと現地にあって派遣チームの中心になってきた、いいぎり代表は、この期間を、①保育施設の開設準備期、②第1号保育所の発足期、③第1号保育所の安定と保育者研修センター"希望の家"の建設準備期――の三つの期間に分けて、くわしく報告しました。

国内支援活動の部では、10月末現在で会員数は265名、この間に集められた活動資金の総額が約1,600万円に達したことが報告されました。このような成果をあげるための「会」のいろいろな活動、まず現地活動のPR、展示会、募金活動などにたずさわってくださった協力団体、グループとして、れんげ会、聖心女子大MSSS、大宮みどり第二幼稚園、池田市ボーイスカウト育成会、鎌倉清泉女子学園、京浜女子大、京都府弁護士会、喜福寺子どもの家、うめだ子どもの家、吉祥寺教会、草加・藤幼稚園、神奈川大学国際部、曹洞宗、フローラ桂台子ども会、横浜市成瀬中学有志、滋賀石山高校有志、札幌琴似小学校有志、北九州市160人の母のコンサートなどの名前があげられました。

この期間の会計報告は、事務局の佐藤和子さん、会計監事の川村フク子さんからなされました。

発足以来の基本姿勢を再確認

ついで、今後の活動方針の討議に移り、2月の発足総会できめた、この会の活動方針の全体、とりわけ「あくまでも難民たち自身の自主的な保育活動を支援するそのためには「会を単なるボランティアのまとめ役にとどめず、一定の目的と計画をもち、一本化した財政によって運営される組織とする」という基本姿勢が、まず、あらためて確認されました。そのうえで、参加者から、今後さらに力をいれるべき項目として①全国の会員ができるだけ協力できる行事の企画と連絡の充実、②幼い難民のうち孤児となった子ども達の援護（里

親、養子)、③現地派遣ボランティア個々への支援体制(生活費の支給、帰国後の再就職の確保)などがそれぞれ提案され、いずれも、その方向で努力することが了承されました。

事務局を強化、理事会を幅広い評議機関に

この総会では、現在の「幼い難民を考える会」の規約の改定もきまりました。改定された新しい規約は、別紙のとおりですが、改定の要点は①「会」の発足当時は準備不足もあっていろいろ弱点をもっていた「事務局」もようやく固まってきたので、今後は「事務局」を国内と現地の活動の調整のかなめとして強化し、その役割を明確にする、②従って、これまで「事務局」的な役割の一部を受けもたされていた「世話人会」は、今後は、はっきりと、会の方針をきめ、活動の指針を打ちだす「評議機関」として位置づけ、広く会の外側の意見も吸収できるようにする(「世話人会」を「理事会」と改称する)、③会の代表者をひとりと限らず2人以上おけるようにする――の三つの点です。

このように改定された規約に従って、さっそく理事の選出が行なわれ、新理事には、いいぎりゆき、五十嵐文子、井沢睦雄、川村フク子、佐藤恒夫、広戸直江、箭内祥周および山極小枝子の8人、新会計監事には深水正勝のそれぞれの皆さんが選ばれました。また、この新理事会の互選によって、代表理事には、いいぎり理事、事務局担当理事には川村理事が、それぞれ就任しました。

こうして、第1回定期総会は、無事、議事のすべてを終え、出席者は、みな、新しい決意を胸に、全国各地へ帰りました。

現地派遣の確保に全力を

初理事会でボランティア支援きめる

第1回定期総会で選出された新「理事会」の今年初の会合が、1月15日、会の事務所で行なわれ、総会できめられた活動方針に沿って、今後の具体的とりくみの課題がきまりました。

活動資金の安定確保に〝賛助会員〟制活用

まず、昨年暮から新春早々にかけて、現地の活動を視察してきた川村フク子事務局担当理事から、昨年12月に開設された「幼児保育研修センター」〝希望の家〟(別項記事参照)と、それを中心に次々と開設されていく保育施設の、それぞれ現状と将来への見とおしについての具体的報告があり、これを受けて、「会」としては今後も引き続き現地ボランティアの一定数の確保と、定期的送りだしに全力を傾けることがきめられました。

現地の活動を支える国内活動については、まず、先の総会で確認された「幼い難民を考える会」の〝組織原則〟をめぐる討論ののち①現地活動のPR、②活動資金集めの強化、③事務局体制の強化、④会員多数の参加できる行事の実践などの項目について、それぞれ具体的課題をきめました。(理事会できまった当面の方針は最後のページにのせました)。

とくに活動資金の確保のためには、前から懸案になっていた「賛助会員」制度の公式な発足によって、この「会」のための友好協力団体を募ること、また、事務局を強化するため、すくなくとも1名の事務局専従スタッフをおくこと、などが当面の実行目標としてきまりました。

矢もタテもたまらず2度の現地行き

あとをたたないボランティア志望者

前号でお知らせした以後の、現地活動ボランティアの方々の動静は次のとおりです。

秋沢ヒロ　(8月22日→12月20日)
関口晴美　(9月29日→2月26日)
森定なほみ　(10月24日→活躍中)途中一時帰国、2度目
田口明美　(11月16日→2月10日)
松本徳子　(1月18日→活躍中)
頓田洋子　(1月31日→3月3日)
秋沢ヒロ　(1月31日→活躍中)　=2度目=
辰濃哲郎　(2月11日→3月16日)
鈴木文子　(2月25日→3月23日)　=2度目=
須田とみ子　(3月10日→活躍中)

いいぎり代表は、あいかわらず、リーダーとして現地にとどまってがんばっています。

また、その他の人々の中でも、秋沢さんや鈴木さんのように、帰国後しばらくしてから、ふたたび現地に2度目の奉仕に舞いもどっておられる方もでてきました。関口さん、森定さんのように4～5ヵ月も長期間の奉仕を続けられる方もいます。

一方では、どうしてもご都合がつかず1ヵ月そこそこの例外的な短期滞在の方もおられます。(原則として今後も、3ヵ月以上の現地滞在が望ましいことには変わりありません)

第1回理事会では、別項記事のとおり、今後も現地活動を支障なく続けるためには、常時4～5名の現地常駐の維持に努力することがきまりました。会員の皆さん方の熱意と、献身的な現地奉仕希望者に支えられて、これまでのところ、派遣計画は予定どおり進行しています。

どうか、これからも、現地行きを希望する方々は、なるべく早いうちから(いろいろと準備に期間を必要としますので……)「会」の事務局に申し込まれて、「派遣選考委員会」と相談を始めてください。

子ども達の目の輝きに未来が……

CYR活動の写真展に集まる関心

「希望の家」が完成し、いよいよ本格化した現地における保育活動の、これまでの歩みと成果を、広く一般の方々に報告するため、「幼い難民を考える会」では、すでに東京都内で2回の写真展を開き、ひき続き大阪など、全国各地でも開催を計画しております。

東京で開いた2度の写真展は、どちらも、テレビ、新聞など、マスコミに次々と取り上げられたため大ぜいの人々が連日訪れ、深い関心と熱いまなざしを、展示された多くの写真パネル、子ども達の絵や作品に、注いでいきました。

第1回目は、1月19日から4日間東京・渋谷の東邦生命ビルのギャラリーで幕をあけました。会場には、一昨年秋の悲惨だったキャンプ内の初期のありさまから、「幼い難民を考える会」の現地メンバーの手で、幼児の保育や保母さん達の養成の始まった昨年春、そして保育活動の中心となる「希望の家」の開設まで、時間を追って紹介する写真パネルが50枚。それに、開所式の展覧会に出品された子ども達のパステル画や粘土細工などが展示されています。

朝一番に訪れた初老の男性が「日本では、難民救援活動は下火になってしまったと聞いていたのに、こんなに〝燃え続けている〟会があると知って、安心しました」と感想を語れば、近所のおばあちゃんらしき人は「私達だって、ほんの少し前は、戦争のつらい体験をしてるんですよね。とても他人ごととは思えませんよ」と口をそえます。

同じ年頃の子どもをもつという主婦が「子ども達の表情が明るくなって、目の輝きを見ても未来への希望がもてますね」と語るかたわら、「子ども達がキャンプの中の保育で得た体験を、自国へ戻ったあと、どのくらい生かせるかですね」と、真剣な問題提起をする方もありました。

それぞれの感想、意見はさまざまながら、一致していたのは、現地で働くボランティアひとりひとりの努力と、この「会」の一貫した活動に対する強い共感と支持激励の声でした。

早朝から熱心につめかけた人々（渋谷の東邦生命ギャラリーで）

テレビや新聞で次々と紹介されて

この渋谷の第1回展示会は、NHKのTVニュースや朝日、毎日、読売の都内版で紹介されましたが、ひき続き、2月21日から27日まで東京・新宿の紀伊国屋書店画廊で開かれた第2回目の展示には、NTV、フジテレビ、東京12チャンネルのカメラも駆けつけ、12チャンネルでは、梅田子どもの家の小坂礼子園長（ことしの1月、現地活動を視察して帰国したばかり）を、夕方のニュース・ショーに招き、インタビューとともに、現地の写真を紹介しました。

このようなマスコミを通じた反響ばかりでなく、会場を訪れた方々の熱心なお勧めもあって、今後、この展示会を、東京都内や、大阪など、全国各地で開き、より多くの人々の眼に、難民キャンプの現状と、ここで行なわれている「幼い難民を考える会」の保育施設づくりの実態と成果を、訴えていく見通しがでてきました。

東京に続いて4月1日から大阪でも

さしあたっては、まず大阪・北浜の日生日立ビル2階のサン・サロンで、4月1日から11日までの、日曜日を除く10日間、毎日午前10時30分から午後7時まで、東京以外では初めての写真展が開かれます。

ぜひ、もっともっと多くのおかあさん達や先生方に、この写真展を見ていただいて、私達の助けをまだまだ必要としている「幼い難民」達のこれからについて、いっしょに考えていく場にしたいと思います。

全国の子ども達に訴え

竹内さん、関口さん、NHKの番組で

「幼い難民を考える会」が、NHKテレビの子ども番組、〝6:00こちら情報部〟に登場、カオイダンで活躍して帰国した竹内恵子さんと関口晴美さんが、インタビュアーに答えて、キャンプの幼い難民のありさま、「会」のメンバーの活動、全国の子ども達へのお願いなどを話しました。

放送日は2月26日、たまたま新宿紀伊国屋で開催中の、現地活動報告写真展のまっさい中であり、しかも同じ26日は、梅田の小坂園長の東京12チャンネル出演とも重なり、この日はさながら、CYRのPRデーの感じでした。

〝こちら情報部〟のこの日のテーマは、「危機を救え!! 幼い難民SOS」。やはり、紀伊国屋の写真展を紹介するフィルムをバックに、竹内さんと、ちょうどこの日の午後現地から成田空港に着き、そのままNHKの放送センターに駆けつけた関口さんが、それぞれ生々しい現地の活動体験を語り、幼い難民の未来の幸福のために、私達日本人として、いまなにをすることが必要かを、全国の子ども達に訴えました。

CYR　FORUM

このCYR　FORUMは、会員みなさんの討論と探求のための広場です

「ボランティア」――社会のための自発的な奉仕。多くの日本人にとってはまだまだ耳新しい、この言葉をめぐって、わがCYRでも、しばしば熱っぽい論議が起こります。ここにご紹介するおふたりの声は、それぞれの体験を通して考えた〝ボランティア論〟であり、また〝ボランティア実践の試み〟です。

「奉仕する側」と「奉仕される側」

新田　仁

A: ボクらは、いまボランティア活動をしている。すくなくとも、そう思ってがんばっている。だけど、たとえば、渋谷駅前の募金活動……あの寒さの中で募金箱を手に叫ぶんだね。「難民問題は、まだ終わっていません。今なお、多くのカンボジア難民は、とくに幼い子ども達は苦しんでいます／皆さん、よろしくお願いします／」って。耳を傾ける人は、ほとんどいないね。それだけに、やはり募金してくれる人があると、すごく嬉しい。「ありがとうございます／」と、それは大きな声でお礼を言ってしまうんだ。

B: でも、そのおカネ、あなた自身のためではなく「難民のため」に入れてくれたんでしょう。

A: それはそうさ。でも「難民のため」に出してもらったものだと思っても、やはり自分のことのように嬉しいのはたしかさ。

B: そこのところよ。もうすこし、話を続けて。

A: 広尾の事務所に行くだろう。テーブルを整頓したり、ゴミを捨てに行ったりする。難民救援とは、直接関係ないことだけど、「会」の活動をスムーズにするために欠かさないことだ。直接は役に立たないように見えて、間接的には大いに役立っている。そういう自覚がなければ、事務局の仕事はつとまらない。

B: 自分が、わずかでもカンボジア難民の役に立っているのだということで、喜びというか、満足感を、そこで味わっているわけね。

A: 多分、現地でがんばっているボランティアの人たちにも、これはあてはまると思うんだがね。ただし、これまで言ったことは、全部、ボランティアとして「奉仕する側」からの見方であることに違いない。

B: ということは、「奉仕される側」、つまり難民の立場からの見方も、別にちゃんとあるってこと？

A: そこなんだよ。「難民のために」と始めたことが、いつのまにか「自己満足のため」だけになってしまっては、それこそ本末転倒だ。ボクらが「難民のために」よかれと思ってすることが「彼ら自身にとってはなんなのか」と、絶えず、自分自身に問い直す姿勢がいちばん大切だと思う。「奉仕の対象となる側」の存在、それらの人々の受け取り方を忘れてしまってただ自分の「奉仕」だけに頭がいってしまっては、なんのためのボランティアかわからない。

B: ボランティアの出発点ってのは、まさに、そこにあったのね。つまり、相手が、どう思って、どう受け取っているか……あなたのことばを借りれば、「奉仕される側」の立場や論理もしっかりつかむことね。

子どもたちのささやかな〝参加〟

若竹芳子

カンボジア難民の悲惨さを知りながらも、積極的に働くことをしない私でした。東京でモンテソーリ教育の勉強を始めて　10ヵ月たったころ、モンテソーリ実践教育の指導にあたっていた「梅田子どもの家」の保母さん達が、カンボジアの幼い難民達に援助の手をさしのべようとしていることを知りました。

昼間は「子どもの家」の保母さんとして働き、夜はモンテソーリ実践教育の指導者として講義をするという休むひまもない中で、なお、カンボジアの難民達、幼い子ども達のために奉仕しようという人々を目前にして、私はただただ驚嘆するだけでした。

それでも、なにかお手伝いできることでもあればと、発足した「幼い難民を考える会」に、さっそく入会させていただいたものの、その後、昨年の4月から勤めにでた私は、まったく名前だけの「会員」で、結局お手伝いすることもできずに過ごしました。マスコミも以前ほど難民のことをとりあげなくなって、このままなに事もなければ、「会員」であることすら、忘れ去りそうな日々を送っていたのです。

そんなある日、私の住む団地（横浜市フローラ桂台）の子ども会で〝恵まれない子ども達のために〟という呼びかけでバザーが開催されました。こうして集めたおカネをどこに寄付すればよいのか迷っている、という話を子ども会の世話をしているおかあさま達から聞きました。

なにげなく「幼い難民を考える会」のことをお話したら、さっそく、子ども会の会合の席に招かれ、カンボジア難民について話す機会をあたえられました。子ども達の相談の結果、バザーの収益金を「幼い難民を考える会」にあずけて、難民キャンプの中の保育施設の建設に役立てることが決まりました。

子ども会のささやかな善意に応えて、いいぎりさんがはるばる訪ねてきて、いろいろ説明してくださいました。

子ども達が、幼い難民達のことを考える中で、戦争のおろかしさ、悲惨さと、平和の尊さを知り、他の境遇の人々の苦しみをいくらかでも担うことのできる人間に成長してくれれば、ほんとうにいいなと思います。

キャンプからの声

乾ききった心を潤す笑い声

秋沢ヒロ

昨年の8月22日夕刻、1時間以上も遅れた飛行機から不安な面持でバンコクのドン・ムアン空港におりた私を、ドシャ降りの雨が迎えてくれた。〝雨女〟の私には、成田を発つときも、バンコクからサムローでアランの宿舎に向かうときも、いつも雨がお供にいた。

でも、いまとなっては、バケツをひっくり返したとよく形容するドシャ降り、あのアランの宿舎のトタン屋根の下の台所ではすぐそばで話す人の声さえかき消すほど、猛烈な雨音も、妙になつかしい。

今はちょうど乾季だから、キャンプ中をホコリを立てて給水車が走りまわっているだろうが、やがてまた雨季になると、雨が、水が、人々の乾いたノドとヒビのはいった大地を潤し、緑の豊かさをよみがえらせるのだ。

だが乾ききってしまったカンボジアの人たちの心をほんとうに潤してくれるものは、いったいなんだろう。

カンボジアの人々に限らないだろうが、おとなの心の支えになるのは、なんといっても、子ども達のなにげないしぐさ、笑い、そして日毎に成長していくその姿ではないだろうか。

そんなに遠くない過去、夜がけっして安眠の時間ではなく、逃げるためひたすら歩き続けるだけの時間だったという生活の中に、本来の子どもらしい暮しのひとかけらもあったろうか。そして、遊ぼうとしても遊び道具ひとつなかった初期のキャンプ。

だが、私達、おとなの心配をよそに、子ども達は、やはり遊びの天才だった。どこにいっても、子ども達は、遊びと、遊びの道具をつくりだす。

子ども達は、新しいものに、とにかく敏感だ。ある日、ハサミとサインペンを使って色の線を引いた短冊を子ども達の前で切ってみせた。初めは、いったいなにが始まるのかと、目をこらしてみていた子ども達が、こちらの切り終わるのも待てないといった様子で、争うようにハサミを持ち、短冊を切ってゆく。ひとつ切り終えると、あとからあとから、いくつも……。

子ども達は、初めてみつけた新しい遊びに、すっかり夢中だ。新しい教材と出会うたびに、子ども達の目はいきいきと輝く。私にも、ボクにもと、たちまち四方から手がとびだしてくる。

子ども達の、こうして自発的に伸び始めた知識と行動の芽を、けっして摘んだりせず、そのまま自然に成長させていくように心がけることが必要だ。

この次、私がキャンプを訪れるときには、単に自発的な芽を摘まないようにする注意力ばかりでなく、その成長をじっくり観察する、たしかな眼をもって行きたい。

キャンプの子ども達にとって、夜がほんとうに静かな休息の時間であり、明日を夢みる楽しい時間であることを、私は心の底から祈りたい。

休みなく成長を続ける子ども達

竹内恵子

キャンプへの道筋は、そのほとんどが田畑で、その間にポツリポツリと人家や学校が見え、水牛や、ときには象が歩いていたりする。

そんな、のんびりとした風景とはまったく場違いの怪物のように、銃をかまえた兵士達を乗せた装甲車や戦車が、突然、眼前に姿を現わす。一見のどかそうに見えるこの土地が、じつはきわめて厳しい戦争のただ中に巻きこまれていることを、否応なしに認識させられる。

ゲートでタイ軍の兵士に許可証を預けて、初めてキャンプ入り。写真で見たキャンプの印象は、鉄条網に囲まれた無表情な収容所の列だったが、実際にその場に一歩はいってみると、そこには間違いなく人々の生活があった。

キャンプの中では、人々は働かなくても食べられるし、住まいも与えられる。しかし、努力をしても、それ以上のなにかを得られるということは、まずない。自分達が、明日はどこへ移されることになるかも知らされない。

そんな中ぶらりんの生活の中でも、子ども達だけは、休みなく成長を続けている。

毎日、きまった時刻に学校へ行く。おやつの前には手を洗う。ゴミはクズかごへ捨てる。そんななんでもないような秩序、ルールといったものが、子ども達の心に、どんなにか平安をもたらしていることだろう。子ども達は、そこでさまざまの体験をし、想像の翼を広げる。

子ども達の初めて描いた絵を見るのは、少しこわかった。もし、それが黒一色で塗りつぶされていたりしたら、どうしたらいいだろうかと考えていた。しかし、心配はまったくの取り越し苦労だった。絵の中で彼らは元気にタコをあげ、ザリガニをつかまえ、虹色のドレスを身にまとった。

かけっこやゲームを指導し、お話も聞かせる「保父」のソバンナ。ピアニカ(簡易楽器)で子ども達と楽しく合奏する保母のシブヘン。鼻のかみ方を教えるヘルパーのパーソン……この人達は皆、われわれの想像を絶する恐ろしい体験をへて、いまだに明日も知れぬ不安の中にいる。それでも、彼らの顔にはほほえみが絶えず、いつでも思いやりを忘れない。

「幼い難民を考える会」当面の活動方針　1981.1.15理事会採択

第1回理事会(別項記事参照)で決まった当面の活動方針は、次のとおりです。(一部省略)

I　タイ国難民キャンプ内の活動

1. カオイダン・キャンプ内に、他の国際組織の協力も得ながら、さらに数ヵ所、「保育施設」をつくる。
2. カオイダン以外の、タイ国内各キャンプにも「保育施設」を開くよう努力する。
3. 「希望の家」を、カンボジア人保育者養成のための研修センターとし、「会」の現地派遣グループは、アドバイザーとして、その運営維持に努力する。
4. 現地活動継続のため、現在の規模(4～5名)の派遣グループの常駐を確保する。

II　国内での現地支援活動

1. 現地活動の成果とその意義のPR。
(CYRニュースとミニ・ニュースの発行、報道機関の利用、現地写真などの展示、他の難民救援組織との交流)
2. 活動資金の継続的確保。
(賛助会員制による、定期的収入源の確保、一般募金の継続、会費納入の励行)
3. 事務局の整備・強化。
(常勤事務局員の確保)
4. 会員の参加しやすい行事の企画と実行。
(現地報告会、バザー、勉強会＝クメール語、難民問題の歴史と現状、カンボジア情勢など＝、日本定住難民との交歓会)

カンボジアの子ども達と楽しい1日

定住センターから鎌倉までピクニック

「幼い難民を考える会」のメンバーの有志達は、昨年の12月7日、神奈川県大和市にある定住促進センターに住むカンボジア難民の子ども達といっしょに、鎌倉までピクニックに出かけ、楽しい1日を過ごしました。

この子ども達は、現在センターで生活しているソムチェンさんの一家の兄弟達と、セタリンさんの弟、ピトレストさんの合計7人。招待した側は「会員」6人の他に、日本青年奉仕協会の2人のボランティアも、特別参加しました。

鎌倉の大仏さまの前で、カンボジアの友達といっしょに記念撮影。

一同は、まず、小田急・江の島電を乗り継いで、鶴岡八幡宮に向かい、境内の茶店で会員持参の手づくりのお弁当をすっかり平げて、帰り道は、長谷の大仏さまを訪ね、みんなで記念撮影をしました。大和のセンターに帰りついたころは日もとっぷり暮れ、冷気が身に染みる時候でしたが、子ども達は元気いっぱい「ほんとうに楽しかったよ。また来てね」と、別れを告げる会員達に手を振っていました。

ソムチェンさん達は、いずれもタイのカオイダン・キャンプ内で、「会」の現地ボランティアと顔なじみだった人々。現地から帰国し、この日ピクニックに参加した鈴木文子さんとは、久しぶりに思い出話に花が咲きました。

定住促進センターで、日本定住の準備をしている、これらの人々が、できるだけ早く私たち日本人の中に溶けこめるためにも、「会」では、このような催し、特に子ども達のための楽しい行事を、今後も企画していきたいと考えています。

なお、この大和定住センターには、この会の理事である井沢睦雄さんが、ことばの指導員として、とくに難民の中の難聴者のための教育にあたっておられます。

事務局からのお知らせとお願い

1,　バザーを、5月10日に開きます。

第3回東京地方のバザーは、きたる5月10日、場所は前回と同じ東京・広尾です。ご不用のものや、ぜひ出品したいものがありましたら、事務局までご連絡を。

2,　クメール語勉強会、中級と並んで初級も再開。

新しい初級コースの先生はセタリンさん。毎週水曜日午後7時から事務所で。中級もひき続き毎週金曜日に行なっています。